

◎議事要旨

1 日時 令和5年10月31日(火) 13:00~14:30

2 場所 財務省国際会議室

3 出席者(勉強会委員)

伊芸 研吾 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科特任准教授

片桐 満 法政大学経営学部准教授

國枝 繁樹 中央大学法学部教授

細野 薫 学習院大学経済学部教授

宮本 弘暁 東京都立大学経済経営学部教授

オブザーバー

中室 牧子 慶應義塾大学総合政策学部教授

総務省行政評価局

(敬称略、五十音順)

(財務省)

河本税制第三課長、吉田税制第三課企画官、染谷税制第三課審査室長

4 議題

法人税のEBPMにおける課題・手法の整理

5 事務局より議題について説明を行い、その後、委員から意見等を伺った。

委員からの主な意見等は以下のとおり。

- ・マクロ経済学の視点から、フィリップス曲線を用いた分析手法も有用と考えられる。その際に、循環的要因と構造的要因が存在するが、より重要なのは、構造的要因ではないか。
- ・分析をしてみて有意ではないという結果になった場合でも、先行研究なども見ながら、さらに様々な分析を行ってみることが大事だと考える。
- ・有意ではないからすべて使えないということではなく、今回の分析では有意と出なかったという解釈も一つの可能性としてある。
- ・ヒストグラムについてさらに細かくプロットしてみると、少しバンチングのようなものもあるが、やはりバンチングがある場合には、もっとしっかり出てくるはず。
- ・今回のようなEBPMを行うときには、対象となる税制改正について、「誰がいつ決めて、適用を受ける側がその改正の内容を知っているか、あるいは知らなかったのか」ということが重要になってくる。
- ・ミクロベースで分析するなら、例えば決算期がずれるだけで、大きな違いにつながる。
- ・ヒストグラムについて、バンチングポイントが見られるというので、一応インセンティブに影響を与えたかどうかというのを見るという意味では、もう少し細かく分析した方がいいのではないかと感じた。

- ・ある特定の箇所に対して、被説明変数だけで構成を行うと、変なバイアスが生じてしまう。ヒストグラムにおいて0から以上しかない場合に、そのバイアスをどのように修正していくかが計量経済学の特徴でもあるため、あまり行わない方がよい。
- ・こういったマイクロデータを使用すると、頻繁に外れ値が出てくる。例えばROAなどでもそうだが、比率などでとると必ず大きな外れ値が発生し、それに結果が引っ張られてしまう。そこは問題ないかチェックすべき。

以上